

明治期酒造業固有の帳簿記録から見る酒造経営 —灘酒造家の「酒類蔵出帳」と「酒類売上帳」の考察から—

A Study of Sake Brewery Management Based on Accounting Records in the Meiji era: Analysis of the Accounting Books of Products and Sales of the Sake Brewery in Nada, Hyogo

中村学園大学 流通科学部

土 井 貴 之

1. はじめに

本稿の目的は、明治29（1867）年度¹における灘酒造家（柴田家）の一次史料を用いて、酒造業²固有の帳簿記録から当時の酒造経営を明らかにすることにある。具体的には、当時の酒造業固有の帳簿の中から『酒類蔵出帳』と『酒類売上帳』を会計的な視点から考察し、酒造経営において、酒造家側による清酒や清酒販売代金の管理だけでなく、『明治29年度醸酒諸般文書』に綴られている酒税に関する申告書の作成にも活用されていたことを指摘する。また、経済史や経営史を中心とした先行研究で言及されている明治期酒造業の商慣習について、酒類蔵出帳と酒類売上帳の帳簿記録から検証する。

本稿が対象とする酒造業は中世から続く伝統産業で、「土産的、土着的、地主的な性質」³なことから、現在でも日本各地で営まれている。明治期の酒造業は主要産業のひとつで、酒造家

が納める酒税は日本の税収に占める割合が1位になるなど、第2次世界大戦が始まるまでは重要な租税であった⁴。

酒造業を対象とした研究⁵は、様々な分野で展開されてきた。臼井・張（2010）を参考にすれば、「現代において酒は文化的産物としてより、経済的産物としてみられ、その商品的価値に関心が寄せられている」⁶ことが理由と考えられる。特に、経済史や経営史の分野を中心に酒造業を対象とした研究が展開されてきたが、土井（2021）は一次史料を用いた会計史分野の研究も必要であると指摘している。

小林（1994）によれば、会計史研究による一次史料とは、会計史研究の基礎となる実在した（する）企業の会計実践の資料のことをいう⁷。また、田中（1982）は、「歴史を研究する人間の鉄則はファースト・ハンドの史料にあたるということである。この点は会計史あるいは管理

1 当時の酒造年度（Brewery Year）は10月1日から9月30日であるが、本稿では史料と統一して「年度」で表記した。

2 酒造業の「酒」には清酒だけでなく焼酎などの様々な酒が含まれるが、井上（1952）や小林（2023）を参考に、近代においては清酒が酒類の代表となっていたことから、本稿では清酒醸造業を酒造業と表現している。

3 山田（1977）、31頁および青木（2003）、7頁。

4 詳細は土井・清水（2022）を参照。

5 詳細は地理学的な研究をまとめた臼井・張（2010）や、経済史や経営史分野を中心に酒造業研究を体系化した土井（2021）を参照。

6 臼井・張（2010）、233頁。

7 小林（1994）、3頁。

会計史についても例外ではない。原史料を手がかりとして歴史を再現することによって、はじめて客観性が発揮しうる。」⁸とし、会計史研究における一次史料の重要性を述べている。

しかし、建部（2003）は、日本を対象とした場合、企業の一次史料を入手することが非常に困難な状況にあると指摘している。イギリスやアメリカなどの諸外国では、会計文書などの企業内史料は歴史的に価値が高いと評価され、資料館などに保存されているが、日本では会計文書はマル秘扱いで破棄されていることも多い⁹。

貴重な一次史料を用いた明治期日本の酒造業を対象とした研究は、少ないながらも蓄積されてきている。天野（1997）は、阿波国板野郡（現在の徳島県板野郡）の木内家文書より、酒税増税の影響をふまえた地方酒造家の経営状況を考察している。明治27（1894）年から同34（1901）年までの清酒造石高（生産量）は185石¹⁰から230石となる小規模な酒造家として分類される木内家において、日清・日露戦争以降の酒税増税により、清酒製造原価に占める酒税割合が3割から5割近くに上昇し、酒造経営が圧迫されていた状況を指摘している。

藤原（1999）は、山形県西田川郡（現在の山形県鶴岡市）の羽根田家文書から、清酒の製造原価に占める酒税割合の比較分析を行っている。明治30（1897）年の34.8%から、明治33（1900）年に52.5%、翌年には60.1%と割合を高めたとし、その要因は酒税の増税にあるとしている。

大豆生田編（2016）は、栃木県芳賀郡真岡町（現在の栃木県真岡市）の近江商人辻家¹¹の明治14（1881）年から明治16（1883）年と明治18（1885）年の『店卸帳』¹²を考察している。明治14（1881）年の酒造所得は3,699円で総所得の

60.7%を占めていたが、翌年は2,006円（41.5%）、明治16（1883）年は949円（28.8%）まで落ち込んだ。その要因として、松方デフレにより一般物価が急速に下落したにもかかわらず酒税が増税され、その増税分が酒の販売価格を上昇させて酒の需要が落ち込んだとされる。

上記の先行研究から、当時の酒造経営において、酒税増税が問題であったことが示唆される。その理由として、酒税は酒の販売量ではなく生産量に課税されるので、酒が売れ残った状態でも納付期限には酒造家（会社）が立て替えて納税する必要があったことが背景にある。

土井・清水（2022）および土井（2023a；2023b）は、酒造経営に大きな影響を与えている酒税がどのように算定されていたのか言及されていないことを指摘したうえで、明治期の醸造簿記書を用いて考察している。その結果、酒税算定で重要な役割を果たす酒造業固有の帳簿の記録内容を分析するだけでなく、当時の醸造簿記書の記述から酒造業固有の商慣習や酒税が売上高に占める割合が約29%～34%であった状況を明らかにした。

これらの先行研究をふまえ、本稿では、日本三大銘醸地のひとつとなる灘（兵庫県）で酒造業を営んでいた柴田家の一次史料となる酒類蔵出帳と酒類売上帳、明治29年度醸酒諸般文書の3つの一次史料を会計史的に考察し、先行研究で明らかにされた点もふまえて、当時の酒造経営を実証する。

本稿の構成は次の通りである。次節では柴田家および柴田家史料の概略を説明する。第3節では柴田家の酒類蔵出帳と酒類売上帳の帳簿記録から、酒造経営の実態を実証する。第4節では明治29年度醸酒諸般文書に綴られた税務署へ

8 田中（1982）、18頁。

9 建部（2003）、16頁。

10 1石あたり約180リットルで換算される。

11 大豆生田編（2016）によれば、辻家は宝暦期（1751年～1764年）に創業し、現在も真岡市で酒造業を営んでいる。

12 大豆生田編（2016）では、真岡店の出蔵（支店）の同時期の『店卸帳』の分析から、出蔵でも効率的な経営が行われていたとしている。

の提出書類を分析し、酒類蔵出帳と酒類売上帳の酒税申告に関わる役割を指摘する。第5節においては第3節および第4節の内容をふまえて考察し、第6節では本稿をまとめたうえで、本稿の貢献と課題について言及する。

2. 柴田家および柴田家史料の概略

2.1 柴田家の概略

柴田家は菟原郡新在家村（現、兵庫県神戸市灘区新在家南町）にて元文元（1736）年に酒造業を開業し、昭和4（1929）年に廃業するまでの約200年間、酒造業を営んできた。寛政5（1793）年における上灘郷新在家村の酒造高は20,679石3升4合、そのうち柴田家は約2割となる3,942石1斗7升¹³の生産高があり、鹿嶋屋（江戸の酒問屋）への委託販売（江戸積み）を展開していた。また、寛政期から文政期（1789年から1829年まで）までの間においては金融業も展開し、尼崎藩・明石藩・龍野藩・麻田藩への大名貸を行っていたとされる。

今回対象とした明治29（1896）年度における柴田家の販売数量は、本蔵と南蔵の酒類蔵出帳から計算すると1,774石9斗9升4合であった。桜井（1981）を参考にすると、明治28（1895）年度における全国の清酒製造場の内訳は、100石未満：14.8%、100石以上500石未満：65.4%、500石以上1,000石未満：14.7%、1,000石以上：5.1%¹⁴であることから、柴田家では当時の日本において大規模な酒造経営が行われていたことが示唆される。

2.2 柴田家史料の概略

柴田家史料は、神戸市文書館（兵庫県神戸市中央区熊内町）に所蔵されている。令和4（2022）

年12月26日現在、約28,000点の柴田家史料が確認されているものの、現在も整理作業は継続されている。

史料の一部は翻刻され、神戸市文献史料第9巻（酒造業中心）・第10巻（大名貸中心）として発刊されている。本稿ではこれらの史料の中から、明治29（1896）年度における酒造業固有の帳簿となる酒類蔵出帳と酒類売上帳（詳細は第3節）、税務署への提出書類が綴られた明治29年度醸酒諸般文書（詳細は第4節）を分析する。なお、柴田家において本蔵と南蔵の帳簿を確認できたが、構成や記録内容が同じであったため、本稿では本蔵の帳簿だけを対象とする。

3. 酒類蔵出帳と酒類売上帳の分析

3.1 酒類蔵出帳と酒類売上帳の概略

酒類蔵出帳（史料1）¹⁵は「石・斗・升・合」単位の物量計算と払出方法が、酒類売上帳（史料2）は物量計算だけでなく売上代金や販売先も記帳されている。両帳簿とも構成は酒造業固有の帳簿となる仕込帳や粕目方帳などの帳簿と同じ大きさで、見出しや枠線が印刷された和紙が紐で綴じられている。また、両帳簿とも甲号と乙号があり、前者は古酒の管理、後者は新酒の管理が行われている。両冊の記録内容や税務署員による確認作業も同じであったため、本稿では古酒の部（甲号）だけを検討した。

3.2 清酒の販売および自家消費に関する考察

先行研究によれば、完成した清酒の払い出しを大きく区分すると、販売と自家消費がある。販売には樽売り（卸売り）・瓶売り（小売り）・東京（江戸）への積送販売の3種類とされる。一方の自家消費としては、蔵人などの飲食や蔵

13 内訳は、長右衛門：1,404石、善右衛門：1,306石8斗、善左衛門：1,090石、清右衛門：141石3斗7升である。なお、神戸市文書館において、本蔵と南蔵以外にも、西蔵と東蔵の史料が存在する年もあり、上記の4名が責任者だった可能性がある。

14 桜井（1981）、59-60頁。

15 一次史料となる酒類蔵出帳は縦書きであるが、紙面の関係で、筆者が横書きで抜粋した。なお、漢字の一部は旧字体のまま記載している（酒類売上帳も同様）。

史料1 酒類蔵出帳

古 酒 ノ 部		
月 日	数 量	事 由
十月三日	七斗	蔵賣
十月五日	七斗	全上
十月九日	六拾貳石〇六升五合	全上
十月廿七日	貳拾八石	東京積
小計	貳百四拾五石六斗貳升八合	
十一月四日	三石五斗	蔵賣
十一月四日	壺石三斗八升五合	瓶詰用
十一月十日	五斗	飲料
十一月廿八日	壺石五斗	蔵賣
明治二九年	十一月三十日□ス㊤	
小計	百〇一石六斗四升六合	
通計	三百四十七石二斗七升四合	
十二月一日	貳拾八石三斗五升	蔵賣
小計	貳百貳拾六石五斗三升五合	
通計	五百七拾三石八斗〇九合 ㊤	
三十年一月	一日古酒現在高	
三百三	十五樽	
残石数	百拾七石貳斗五升	
一月四日	三斗五升	蔵賣
小計	四拾壺石三斗	
通計	六百拾五石壺斗〇九合	
二月二日	三斗五升	飲料
小計	拾壺石九斗	
通計	六百貳拾七石〇〇九合	
三月一日	三斗五升	蔵賣
小計	貳拾四石五斗	三月廿一日皆違甲告ノ際古酒現在高三拾九石五斗五升
通計	六百五拾三石五斗〇九合	
三十年三月廿	三日現在 ㊤三拾九石五斗五升	
	三五入㊤ 百十三樽	
三月廿九日	三斗五升	蔵賣
三月三十日	壺石四斗	全上
小計	壺石七斗五升	
通計	六百五拾五石貳斗五升九合	
四月一日	貳石壺斗	蔵賣
四月十九日	三斗五升	蔵賣
四月廿三日	三石五斗	全上
小計	拾貳石九斗五升	
通計	六百六拾八石貳斗〇九合	
五月一日	三斗五升	蔵賣
小計	貳十四石八斗五升	
通計	六百九拾参石五升九合	十月一日現在高三對シ十四石八升欠減
	残ナシ	

柴田家397『酒類蔵出帳甲号（本蔵）』より抜粋（太字は朱記を示す。以下、同じ。）

史料2 酒類売上帳

月 日	酒名	数 量	代 價	事 由
十 月 三 日	清酒	七斗	拾五円	当村柴田邦松へ賣渡
十 月 五 日	全	七斗	拾五円	神戸仲居庄太郎へ賣渡
十 月 九 日	全	六拾貳石〇六升五合	千百七拾七圓五十一錢四厘	大阪嘉納純一へ賣渡
十月廿七日	全	貳拾八石		東京鹿嶋利右エ門積送
	小計	貳百四拾五石六斗二升八合	小計 四、一五、一、六八三	
十一月四日	全	三石五斗	七拾五円	神戸仲居文吉賣渡
十一月五日	全	三斗三升六合	七円五錢六厘	当村柴田邦松賣渡
全 日	全	貳斗壹升五合	四円五拾壹錢五厘	神戸仲居文吉賣渡
十一月廿九日	全	壹石五升	貳拾貳円五十錢	当村柴田邦松賣渡
二十九年	十一月	三十日□ス㊤		
	小計	百〇壹石壹斗壹升四合	小計 二、〇七六、〇六二	
	通計	三百四拾六石七斗四升貳合	通計 六、二二七、七四五	
十二月一日	〃	貳拾八石三斗五升	五百四拾四円拾六錢	大阪円山市松賣渡
	小計	貳百貳拾四石七斗〇九合	小計 四、六〇二、二九七 通計 一〇、八三〇、〇四二	
	通計	五百七拾壹石四斗五升一合	蔵出高ニ對シ貳石三斗五升八合	合欠減内訳
			壹石七斗 貳拾 八升七合 貳拾貳圓陸出 五斗七升一合 貳拾陸現在	
三十年一月一	日古酒現在	高 百拾七石二斗五升		
一 月 四 日	清酒	三斗五升	四円廿錢	河原都賀喜代松賣渡
三 月 廿 日	〃	三石五斗	七拾五円	横濱渚支店積送
	小計 通計	貳拾三石九斗三升貳合 六百四十五石二斗〇一合	小計 五〇五、七三〇 通計 一一、二六五、五八四	
		三十年三月廿三日	調査㊤	
三月廿九日	〃	三斗五升	七円五十錢	当村柴田邦松賣渡
四月十八日	〃	三斗五升	七円五十錢	□□ノ木賣渡
四月十九日	〃	三斗五升	七円五十錢	全人賣渡
五月三十日	〃	壹石四斗	小計 三、一〇三〇 通計 一三、九〇六、三三四	神戸松浦権兵衛賣渡
	小計	貳拾五石一斗三升	八合	
	通計	六百八拾五石二斗	六升四合	廿四石八斗五升 五月中蔵出 二斗八升九合 □残高 貳、二十五石一斗三升八合 賣立残リナシ
		蔵出高ニ對シ		
		六八五、二六四 賣立 五、六一〇 飲料 三、一八五 欠減		

柴田家396『酒類売上帳甲号（本蔵）』より抜粋

人たちが帰省する際の手土産、神酒としての寄付といった酒造業固有の商慣習が明らかになっている。これらの取引記録が柴田家の一次史料からも確認できた。

酒類蔵出帳（史料1）の事由欄から判断すると、「蔵売（10月3日等）」が樽売り、「東京積（10月27日）」が東京への積送販売、「瓶詰（11月4日）」は瓶売りするための作業、「飲料（11月10日）」は自家消費と考えられる。これらの4つ

の取引のうち、蔵売と東京積は酒類売上帳（史料2）にも記帳されるが、瓶詰と飲料は販売取引ではないので、酒類売上帳（史料2）への記載はない。以下、取引ごとに考察する。

第1の蔵売りは樽単位で取引され、酒類蔵出帳（史料1）にも酒類売上帳（史料2）にも記録される。たとえば10月3日の取引記録を確認すると、酒類蔵出帳（史料1）の数量欄の7斗とは、2樽が出荷されたことを意味（1樽＝3

斗5升)する。そして、酒類売上帳(史料2)には、代価欄の15円は販売代金、事由欄の「当村柴田邦松賣渡」が販売先として記録される。他の取引内容から総合して判断すると、販売単価は1樽あたり7円50銭で、販売先は柴田家の醸造場がある同じ村、大阪、東京の顧客となっている。販売先と販売債権の管理が行われていると考えられる。

第2の東京積でも樽単位で取引され、両帳簿に記録される。たとえば、10月27日に28石(80樽)の酒を江戸時代からの取引先と考えられる東京の鹿嶋利右衛門(詳細は第2節第1項)へ積送した。ただし蔵売りとは違い、酒類売上帳(史料2)の代価欄は空白となっている(他の積送販売についても同様)。その理由について、当時の醸造簿記書の内容を参考に検討する。

積送販売について、亀井(1890a; 1890b)を考察した土井・清水(2022)では現在の手許商品区分法のような処理が行われていたことを指摘している。また、曽根(1903)を分析した土井(2023b)では、積送を遠隔地への販売という意味で用い、売上と積送売上として処理する方法が説明されている。柴田家では後者の処理で行われているようで、積送中に破損等が生じた場合には決済時に値引が行われるので、現在の出荷基準ではなく検収基準のように、値引後の確定した金額で売上高(売上債権)を確定させていたと推測する(詳細は第4節第3項)。

第3の瓶詰は、酒類蔵出帳(史料1)には瓶詰時に清酒量を計上し、酒類売上帳(史料2)には販売時に清酒量と販売代金、販売先が記録される。たとえば、酒類蔵出帳(史料1)には11月4日に1石3斗8升5合分の清酒が瓶詰めされた記録が行われ、酒類売上帳(史料2)には11月5日に3斗3升6合の清酒を7円5銭6厘で柴田邦松へ、2斗1升5合を4円51銭5厘で仲居文吉へ売り渡した取引が記帳されている。酒類蔵出帳(史料1)と酒類売上帳(史料2)には記載できていないが、11月5日以降に

西村源治郎等への販売記録や12月5日に瓶詰め作業の記録が確認できる。なお、販売単価は1樽(3斗5升)あたり7円50銭が基本だが、瓶の大きさごとで単価は異なっていた。

第4の飲料では、自家消費する都度、酒類蔵出帳(史料1)だけに計上される。しかし、販売に関する取引ではない自家消費に関する物量計算が、酒類売上帳(史料2)でも確認できた。12月以降の毎月末、清酒の蔵出高と売上高を比較し、自家消費量を確認している記録がある。たとえば12月末において、酒類蔵出帳(史料1)には「通計五百七拾三石八斗〇九合(573.809石)」の計上と、酒類売上帳(史料2)には「通計五百七拾壺石四斗五升一合(571.451石)」の計上、および両帳簿の通計の差「蔵出高ニ對シ式石三斗五升八合(2.358石)」の記載がある。さらに、2石3斗5升8合差の内訳を意味する「一石七斗(1.700石)飲料、八升七合(0.087石)瓶詰破裂流出、五斗七升一合(0.571石)瓶詰現在」という記載が酒類売上帳(史料2)から確認できる。順番に解析すると、1石7斗は自家消費分で、酒類蔵出帳(史料1)に計上されている5斗(11月10日)、1斗5升(12月20日)、3斗5升(12月22, 25, 30日)から算出したと考えられる。8升7合は瓶破裂による破損で、最後の5斗7升1合は瓶詰の状態での在庫量と推測される。

3.3 清酒の在庫および売上債権の管理と酒税申告の役割

酒類蔵出帳(史料1)と酒類売上帳(史料2)は、前述してきた4つの期中取引だけでなく、清酒の棚卸作業に関する記録も確認できる。月ごとに清酒の出荷量として「小計」が、月ごとの小計を累計した「通計」が朱記される。これらの物量計算は、清酒の在庫管理だけでなく、月初めの在庫量や月ごとの出荷量を税務署への申告書作成(詳細は第4節)に重要な役割を果たしている。

帳簿棚卸高と実地棚卸高の確認作業の記録を解析する。まず、帳簿棚卸高について説明する。酒類蔵出帳（史料1）の見出し部分に記載のある「十月一日現在高七百七石一斗三升九合（707.139石）」と12月末通計「五百七拾三石八斗〇九合（573.809石）」との差は133石3斗3升となり、そのうち瓶詰めされた酒の残高5斗7升1合となるので、残りの132石7斗5升9合が樽での帳簿棚卸高となる。

次に、実地棚卸高に関する記載が両帳簿から確認できた。酒類蔵出帳（史料1）では「三十年一月一日古酒現在高三百三十五樽残石数百拾七石二斗五升（117.250石）」、酒類売上帳（史料2）においても「三十年一月一日古酒現在高百拾七石二斗五升（117.250石）」として朱記されている。なお、前者の「三百三十五樽」という記載は棚卸作業で確認した樽の数で、3斗5升で換算して117石2斗5升を算出したと考えられる。

そして、帳簿棚卸高と実地棚卸高の確認である。12月末時点における帳簿棚卸高132石7斗5升9合と実地棚卸高117石2斗5升の差は16石8升であるが、両帳簿からもその記録が確認できなかった。しかし、酒類蔵出帳（史料1）の最後（5月末）に記載されている「十月一日現在高二對シ十四石八升（14.080石）欠減」は、10月1日現在の残高707石1斗3升9合から蔵出高693石5升9合を控除して、14石8升を算出したと考えられる。12月末時点の16石8升と乖離していることから、12月末段階では簡易的な棚卸作業であった可能性がある。

さらに、酒類売上帳（史料2）でも棚卸作業に関わる記録がある。5月末の最後に計上されている「蔵出高二對シ六八五、二六四（685.264石）賣立 五、六一〇（5.610石）飲料 二、一八五（2.185石）欠減」の意味を推察してみる。酒類蔵出帳（史料1）で把握した蔵出高693石5升9合と、酒類売上帳（史料2）で集計した売上

高685石2斗6升4合との差より、7石7斗9升5合を求めることができる。この7石7斗9升5合の内訳として、酒類蔵出帳（史料1）より算出できた自家消費分の5石6斗1升と棚卸減耗分の2石1斗8升5合を把握し、酒類売上帳（史料2）にも記録されたと考えられる。明治29（1867）年度の柴田家においては、上述してきたような酒類蔵出帳（史料1）と酒類売上帳（史料2）の物量計算によって、厳格な清酒の管理が行われていたことを指摘する。

上記のような精緻化された清酒の物量計算は、酒造家だけでなく、税務署員にも活用されている。たとえば、酒類売上帳（史料2）に「三十年三月廿三日調査」という記載と検印がある。これは、皆造検査¹⁶の記録と税務署員による検印で、酒類蔵出帳（史料1）にも「三十年三月廿三日現在三拾九石五斗五升（39.550石）」の記載と検印がある。本稿では紙面の関係で説明を割愛しているが、柴田家の酒造業固有の帳簿となる酒造原品受払帳や仕込帳、粕目方帳にも同じような記載と税務署員による検印が確認できる。当時の酒税は酒の査定石数（生産量）をもとに算定されたが、酒の査定石数を裏付けるだけの、主要原料となる米の購入記録から、酒粕の産出高、酒の販売記録を検査していた状況が垣間見える。

このような清酒の物量記録だけでなく、酒類売上帳（史料2）には売上高の貨幣記録も行われている。前述のように積送販売は計上されないが、月ごとに売上高の小計と通計が算出される。酒類売上帳（史料2）の5月31日の代価欄に計上されている古酒の部通計は12,906円33銭4厘、新酒の部通計は1,741円72銭4厘（史料省略）で合計14,648円5銭8厘となる。

3.4 柴田家における酒税の影響

本項では、柴田家における酒税の影響を考察する。酒類売上帳（史料2）によると、柴田家

16 皆造検査とは、製造した清酒および酒粕の数量の総計を確認する最終検査のことをいう。

の清酒販売単価は1樽あたり7円50銭である（詳細は第3節第2項）。また、明治29（1867）年度における酒税率は、1石あたり7円であった。単位を斗に換算して算出した結果、売上高に占める酒税の割合は、当時の醸造簿記書の割合とほぼ同じ約33%であった（詳細は第1節）。

4. 税務署への申告書類

酒類蔵出帳（史料1）や酒類売上帳（史料2）の帳簿記録は、柴田家内部における酒の在庫や売上債権の管理だけでなく、税務署へ提出する申告書類にも活用される。本節では、一次史料となる明治29年度醸酒諸般文書に綴られた2種類の申告書について説明し、酒類蔵出帳（史料1）と酒類売上帳（史料2）の役割を指摘する。

酒の月初在庫量を報告した酒類現在高申告（史料3）の内容から確認する。自製欄の「七百〇七石壺斗三升九合（707.139石）」は、酒類蔵出帳（史料1）の最上段左の「十月一日現在高七百七石一斗三升九合（707.139石）」と一致している。なお、前年度の史料整理がなさ

れていないため分析できていないが、酒類蔵出帳などの帳簿記録から算出されたと推測する。

月初の在庫有高だけでなく、毎月の酒の出荷量についても申告される。清酒蔵出石数申告（史料4）の内容を確認すると、古酒欄の「式百四拾五石六斗貳升八合（245.628石）」は、酒類蔵出帳（史料1）に計上された10月3日から10月29日までの小計と一致する。提出された日付も11月1日となっていることから、酒類蔵出帳（史料1）の出庫記録をもとに清酒蔵出石数申告（史料4）が作成されたことが示唆される。

なお、両申告書とも、酒造家である柴田長右衛門が兵庫県知事宛へ提出している。しかし、明治29（1896）年10月1日より酒造税法、同年11月1日より税務管理局官制が施行されたので、酒類現在高申告（史料3）の作成時点（10月1日）では兵庫県知事宛の申告になるが、清酒蔵出石数申告（史料4）の作成時点（11月1日）では大阪税務管理局長宛になるはずである。備忘記録として、明治29年度醸酒諸般文書に保存されたため、訂正されていない可能性がある。

史料3 明治29年10月1日酒類現在高申告

酒造蔵字	酒名	自 製	移 入
本 蔵	清酒	七百〇七石壺斗三升九合	ナ シ
右之通相違無之候也			
明治廿九年十月一日			
武庫郡都賀濱村ノ内新在家村六拾五番屋敷			
柴田長右衛門			
兵庫縣知事周布公平殿			

柴田家3349『明治29年度醸酒諸般文書』より抜粋

史料4 明治29年10月中清酒蔵出石数申告

区 別	蔵出石数
新 酒	
古 酒	式百四拾五石六斗貳升八合
移入酒	
煮込酒	
右武庫郡都賀濱村ノ内新在家村六拾五番屋敷	
字本蔵酒造場分前記之通ニ有之候此段申告候也	
武庫郡都賀濱村ノ内新在家村六拾五番屋敷	
明治廿九年十一月一日 柴田長右衛門	
兵庫縣知事周布公平殿	

柴田家3349『明治29年度醸酒諸般文書』より抜粋

5. 考察

本節では、第3節と第4節の内容をふまえて、明治29（1896）年度における柴田家の酒類蔵出帳と酒類売上帳の帳簿記録から当時の酒造経営を考察する。酒類蔵出帳では払い出しごとの物量計算が、酒類売上帳では物量計算だけでなく、売上代金と販売先が記帳される。12月末や3月末には両帳簿の払出記録を比較して、酒の自家消費量や棚卸作業の物量計算が確認されたことから、当時の柴田家においてはかなり正確な酒の管理が行われていたと実証される。

さらに、酒造業固有の帳簿記録や税務署への提出書類から、酒造家側による酒造経営の管理のためだけでなく、税務署側による酒税の算定のためにも、酒造業固有の帳簿記録が活用されていた点を明らかにした。具体的には、当時の日本で重要な位置を占めていた酒税の基礎となる酒の査定石数を裏付けるだけの酒の販売記録について、3月末の皆造検査が行われた際に、税務署員の検印が行われていた。

また、先行研究で明らかにされていた、酒造業固有の商慣習や、酒税が酒造経営を圧迫していた状況について、柴田家史料からも確認できるか検討した。その結果、以下の4点について、先行研究で指摘されていた内容について検証できた。

第1に、酒の販売方法に関する商慣習がある。先行研究では、樽売り・瓶売り・積送販売（江戸積み）という3つの販売方法があったことが確認されているが、柴田家の史料でも検証できた。具体的には、酒類蔵出帳は物量、酒類売上帳では物量と金額で3つの出庫記録が計上されていた。

第2に、売上高に関する当時の収益認識が垣間見えた。当時の醸造簿記書では、現在の出荷基準のように、出荷と同時に出荷量と円単位による売上高が計上される。ただし、積送販売に関しては、手許商品区分法で処理する方法と現在の検収基準のような処理方法の解説が当時の醸造簿記書から確認できた。柴田家の場合、樽売り・瓶売りについては、出荷と同時に出荷量と円単位による売上高が計上されていた。また、江戸時代からの取引先と推測される鹿嶋屋への積送販売については、円単位欄が空欄となっていたことから、現在の検収基準のような方法が採用されていたことが実証された。

第3に、酒造業の商慣習のひとつとなる、酒の自家消費についても柴田家史料から検証できた。酒造家や蔵人の食事や蔵人の手土産として、酒や米などが振舞われていたことが明らかにされている。柴田家の酒類蔵出帳と酒類売上帳において、酒の自家消費に関する取引記録が確認

できた。

第4に、柴田家の一次史料からも酒税が酒造経営を圧迫していたことが垣間見えた。柴田家における売上高に占める酒税の割合は、当時の醸造簿記書の割合とほぼ同じ約33%であった。

6. おわりに

本稿では、灘で酒造業を営んでいた柴田家の一次史料となる、明治29（1896）年度の酒類蔵出帳と酒類売上帳、明治29年度醸酒諸般文書を会計的な視点から考察した結果、当時の酒造経営を明らかにすることができた。明治期酒造業固有の帳簿となる酒類蔵出帳と酒類売上帳では正確な物量計算が行われ、帳簿記録が酒税申告において重要な役割を果たしていた。また、先行研究で言及されていた、酒税が酒造経営を圧迫していた状況や酒造業固有の商慣習が、酒類蔵出帳と酒類売上帳の帳簿記録からも実証できた。

本稿の貢献は次の2点である。第1に、明治期日本における酒造業固有の帳簿の酒造経営におけるその役割を示した点にある。酒類蔵出帳や酒類売上帳は、現在の視点で捉えると、酒造家側だけで酒の在庫や債権の残高を管理する補助簿のような印象を受けるが、当時の重要な租税となる酒税の申告において、税務署側からも活用されていた点について言及した。

2点目は、明治期酒造業研究に対して、先行研究を会計史的な視点から検証・補完できた点と新たな示唆を提供した点である。本稿の会計史的な考察から、「経済史、経営史研究のための道路工事、あるいは、工具作りの役割」¹⁷を果たすことができた。また、柴田家は、日本全国的には大規模酒造家に分類されるが、灘酒造業の中では平均的な生産高となる¹⁸。大島（2016）が、日本三大銘醸地のひとつ「伏見（京都府）」を対象とした酒造業研究について、「清酒産地

として伏見の発展を正確に把握するためには、2番手以下の酒造家たちがいかに立ち回ったのかを明らかにする必要があるだろう」¹⁹と指摘していることを参考にすれば、本稿は灘酒造業研究にも貢献できたのではないかと考える。

しかし、本稿には課題も存在する。柴田家が用いていた明治29（1896）年度の酒類蔵出帳と酒類売上帳、明治29年度醸酒諸般文書の3冊だけが対象で、残りの帳簿との考察が不足している。今後、仕込帳や粕目方帳といった酒造業固有の帳簿を分析する必要がある。さらに、酒造業固有の帳簿がどのような形で形式化・組織化・精緻化されたのか、神戸市文書館に保存されている柴田家史料を用いた考察を継続していきたい。

参考史料・文献等

参考史料

神戸市文書館、柴田家

- 396『明治29年度酒類売上帳甲号（本蔵）』。
- 397『明治29年度酒類蔵出帳甲号（本蔵）』。
- 398『明治29年度酒類売上帳乙号（本蔵）』。
- 399『明治29年度酒類蔵出帳乙号（本蔵）』。
- 3349『明治29年度醸酒諸般文書』。
- 15266『昭和3年度摂津灘五郷清酒酒造石高調査票』。

参考文献

- 青木隆浩（2003）『近代酒造業の地域的展開』吉川弘文館。
- 天野雅敏（1997）「所得税調査関係資料からみた阿波藍商の経営動向—明治中・後期の木内兵右衛門家を中心にして—」『国民経済雑誌』第175巻第6号、1-15頁。
- 井上洋一郎（1952）「伏見酒造業の発達」『京都大学経済学会経済論叢』第69巻第3・4号、180-194頁。
- 臼井麻未・張貴民（2010）「酒に関する地理学的研究の現状とその課題」『愛媛大学教育学部紀要』第57号、227-236頁。

17 小倉（1962）、序3頁。

18 『昭和3年度摂津灘五郷清酒酒造石高調査票』には、明治17（1884）年度から昭和3（1928）年度までの、各酒造家（会社）における酒の査定石数がまとめられている。なお、本史料の考察は別稿で行う予定である。

19 大島（2016）、5頁。

- 大島朋剛 (2016)、「酒造業史研究における『伏見酒造組合資料』の利用可能性」、『京都大学経済資料センターニューズレター』No.2, 4-6頁。
- 大豆生田稔編 (2016)『近江商人の酒造経営と北関東の地域社会 真岡市辻善兵衛家文書からみた近世・近代』岩田書院。
- 小倉栄一郎 (1962)『江州中井家帖合の法』ミネルヴァ書房。
- 亀井亮之 (1890a)『実業応用醸造簿記学精理上中』京都簿記学校。
- (1890b)『実業応用醸造簿記学精理下』京都簿記学校。
- 小林健吾 (1994)『日本会計制度成立史』東京経済情報出版。
- 小林恒夫 (2023)『九州の酒造業と杜氏集団』農林統計出版株式会社。
- 桜井宏年 (1981)『清酒業の歴史と産業組織の研究』中央公論事業出版。
- 曾根純 (1903)『実践醸造簿記新書』内田書店。
- 建部宏明 (2003)『日本原価計算理論形成史研究』同文館出版。
- 田中隆雄 (1982)『管理会計発達史』森山書店。

土井貴之 (2021)「近世・近代酒造業に関する会計史研究の展望」『ビジネス科学研究』第10号, 21-30頁。

—— (2023a)「明治期清酒醸造業の間屋制家内工業的簿記」—『実践醸造簿記新書』(1903)から見る酒造経営の記録—『流通科学研究』第22巻第2号, 69-82頁。

—— (2023b)「三位一体酒造業体制における近代酒造業の酒造経営と酒税の管理—実地適用醸造簿記 (1903) を用いた考察—」『日本経営診断学会論集』第23巻, 1-6頁。

——・清水泰洋 (2022)「明治期醸造業会計の研究—『実業応用醸造簿記学精理』(1890)に見る記録と酒造経営」『国民経済雑誌』第225巻第2号, 45-64頁。

藤原隆男 (1999)『近代日本酒造業史』ミネルヴァ書房。

山田盛太郎 (1977)『日本資本主義分析』岩波書店。

参考 URL

灘酒研究会「灘の酒用語集」<http://www.nadaken.com/main/jp/>, 令和6 (2024) 年1月22日最終確認。

